

モードは語る

中野 香織

文化や芸術はいったん継続できなくなると、再開までに時間も労力もかかる。まして職人の手仕事がになう技術は伝統が途切れると、復活は困難を極める。

先人は危機が訪れた時、貴重な伝統技術を存続させるためどのような努力を行ってきたのだろう。たとえば第2次世界大戦中。奢侈（しゃし）品の製造販売制限がおこなわれ、多くの伝統技術が途絶えたが、守り抜かれたケースもある。

まず創業1555年、友禅染のきもの老舗、千總である。友禅染の技術保存資格者として着物の製造販売は許可されたものの、需要などあるはずもない。

需要もない、布地も乏しい、そんな時

危機下で芸術を守る

「必要」装いを技術を継承

この会社は、技術を途絶えさせないために、腰から下だけの着物を作り続けて職人の生活を支えた。精緻な刺繍（ししゅう）や染色をほどこされた圧巻の作品は、戦時の騒乱のなか、職人がこつこつと仕上げた非売品である。ピアノにたとえば、超絶技巧練習曲。極限状況で技術を守り抜いた結果、千總は終戦後復活を果たし、今日も支持されている。

もう一例はミキモトである。真珠養殖事業が禁止され、生産は縮小し、職人技術の保護どころか、操業じたいが困難になった。軍国主義一色の日本において、真珠加工技術は不要不急の最たるものである。いかに継続していけるのか？



職人の仕事の粋が光る、着られない着物

ここで粋な助っ人が登場する。大阪の造幣局がミキモトに「勤労顕功章」の加工・仕上げの注文を出す。大宮御所、皇后宮職が、改作品や注文許可品の注文を与える。必要はなくても、それができる立場にある人々が技術継承のために一肌脱ぎ、「必要」を装った。おかげでミキモトの職人の伝統技術は戦時下も失われずに済み、2012年には「世界でもっとも価値のあるラグジュアリーブランド トップ 100」のなかで日本から唯一、ミキモトが選ばれている。

このコロナ禍の時期、芸術や文化、職人技術をなんとしても守りぬくことは、未来の日本の国力にとっての重要課題である。友禅染の美しさ、高貴な真珠の輝きは、企業のブランド力を超えて日本の文化力の象徴として世界から一目置かれている。（服飾史家）